

内 容	演 題	講 師
地域の取組紹介 【高知県】	「いまやらねばいつできる わしがやらねば たれがやる」	株式会社海洋堂 館長 宮脇 修 氏
	<p>今回のテーマは、彫刻家の平櫛 田中（ひらくし でんちゅう）先生の100歳の時の言葉である。107歳で亡くなるまで制作意欲が衰えず、満100歳の誕生日を前に、30年分の材料である材木を庭に積まれたという逸話がある。80歳の頃から引用させていただいている。</p> <p>ホビー館づくりは長年の夢であったが、1店目のミュージアムとして滋賀県長浜の黒壁の街に、その後2011年7月に高知県四万十のへんぴなところに小学校の廃校を利用した「ホビー館」をオープンした。</p> <p>ミュージアムというと高価なもの、というイメージだが、僕のミュージアムは人と同じ目線で見えるものであり、海洋堂のフィギュアを展示している。四万十川の中流域から6kmほど山の狭い道をさかのぼるので、大阪からだと車で5～6時間かかる。それでもオープン時には千人の観光客が来られた。</p> <p>ホビー館をオープンするにあたり、町の人は年間に1～2万人来場者があれば良い方では、と冷ややかな目で見ていたようであったが、毎年10万人の方が訪れている。高知県知事の協力で、狭かったホビー館までの道も徐々に広がり、現在は60～70%が県外からの観光客である。ただ、窪川にはホテルがなく、中村市や高知市に宿泊することになる。ホビー館のみでは来場者は1時間あまりで帰られるので、もう少しゆっくりしていただけるように、と次の年には「かつば館」をホビー館の1km手前につくった。それでも帰られる背中を見ていると心から楽しんでいないと感じられ、さらに今年はかつば館の2号館をつくり、ようやく楽しんで帰っていただけるようになった。</p> <p>地域の活性化は高知県の全市町村がキャッチフレーズとして掲げているが、ほとんど実現できていない。四万十町は高齢者が多いため、いろいろ不便ではあるが、年金をもらって米や野菜を自分で作れば何とか生活はできる。そんな地域にホビー館をつくるとうるさいだけ、と地域の方々の喜びには至っていない。町との共同の事業にもならないため、自分の養老資金をつぎ込んでつくっている。来年は裏山に宿泊施設をつくりたいと思っている。若いスタッフに借金を残さないようにと思っているが、年間10万人程度では収入にはならない。現在は道が狭くて観光バスが入れない場所があるが、県がバイパスを建設中で来年4月にオープンする。観光バスが入れるようになり、20～30万人の観光客が訪れるようになると、地域の人や行政の心理は変わり、協力が得られるのではと期待している。今が正念場だと思っている。</p> <p>ひよんなことで、高齢者でよたよた軍団という組織を作り、「若者1人の仕事は年寄りが3人よればできる」ということで、「奇想天外」という会社を立ち上げた。四万十の大自然は本当に素晴らしい。大阪に帰ると空気がくさいと感じる。都会の子どもたちが四万十の大自然に触れて、ものづくりができるような形になればと思っている。</p> <p>地域活性化は掛け声だけではなく、実質的にみんなが一緒にならないとできるものではない。地域活性化ということで参考にしたいのは、弘法大師が1200年前に八十八箇所霊場を四国につくったアイデアである。四万十の山奥だからこそその面白さを強調していきたいと思っている。</p>	
<p><質疑・応答></p> <p>火燧・安部氏：経験豊富な方でも効果が出るまでには何年も要するのだなと思った。後継者を育てるためにどのような取組をしているのか。</p> <p>宮脇氏：後継者を育てることは難しい。地域の人には観光客が教える形でホビー館の認識が高まっている。地域の若い人が持っている能力を見出すには4～5年はかかる。若い人を育てるとするのは難しい問題であると思っている。</p> <p>山本先生：人口減少で地域の元気がなくなっている中、地域の後継者を育てるという意味では、観光客も一役買っているとのことである。</p>		